

1984年皆既日食ニューギニア観測団出発への道

木村 精二

本誌前号(1984年4月号)のトップに、この日食の速報を大越氏が書いておられる。文中に「……ツアーは全て不成立となり、各ツアーの申込者は、……自主グループに合流することになった。……」とあるが、このあたりの事情を少し詳しく書いてほしい、というのが、筆者への編集部への依頼のようである。

実は、1984年5月の金環皆既日食のときに、ツアーが乱立してしまい、少なからぬ影響を関係者に与えた。その内情について筆者は、かなり詳しく承知しているだけでなく、渦中において参加希望者に迷惑がなるべくかからぬよう努力したが、予想外のこと——エイジェントのうらをかような輩がいたため、右往左往した苦い経験がある。そのことについては公にすることを避けて、類似のことが起きないようアンテナも張りめぐらしておくことが自分のつとめと、思ってきた。次の日食のときも、参加者の割にツアーの数が多いたことが予期されていたのである。

さて今回、つまり1984年11月の皆既日食に際しては、観測目的地が二つに大別された。ニューカレドニア沖とパプアニューギニアである。ここで記すのは、後者のツアーのみとする(前者に関係することを少しあとに述べるかもしれない)。

ニューギニアにこの日食を見に行こうという呼びかけを、多くの人の目に触れる形で初めて行なったのは、京都の篠田氏で、本誌1983年4月号「フラ訪問の記」を通じてである。篠田氏はさらに具体的な計画を練って関西方面の仲間から同行者を募っておられたようで、現地での泊りは、下見のときに接触された牧師館としたいとのことであった。

次に計画を作ったのは、筆者も関係した自主グループで、秦先生を事務局として、ダイレクトメールとロコみでPRをはかった。観測予定地はフラ、ただし泊りはポートモレスビー(ホテルトラベロッジ)。1984年7～8月のことである。

ほとんど同じ時期に、いくつかのエイジェントの主催旅行が広告をはじめた。いずれも観測予定地はフラ、経由地のホンコンでプラネタリウムを訪ねる日程が組み込まれたものもあっていずれも(自主グループをふくめ)同じような旅程となった。筆者の知る限り、次の2社3営業所主催である。東京航空サービス(本社内日食観測チーム)・近畿日本ツーリスト虎の門海外旅行営業所・同池袋サンシャインシティ営業所。

1984年皆既日食ツアーについて本誌の記事(1984年2月号)では、上記5本のうち4本については紹介されているが、残り1本についてはその広告が「月刊天文」1984年10月号に載っているのに、紹介する時間的余裕がなかったようである。

1984年10月上旬といえば、出発の5～6週間まえだが、上記5本のツアーへの応募状況は極めて低調であり、10人以上の団体成立が確からしくなったのは、自主グループだけであった。自主グループが打合せ会を開いたのが10月9日、他のツアーはいずれも説明会を開くに至らない

状態であった。某社は、はじめ強気で、有力なオーガナイザーがいるから10名以上すでに確保されている、とか戦跡めぐりツアーが往復のエアールと一緒に使うから独自で大丈夫といていたが、結局はエイジェント同士に加えて、自主グループとの話し合いによって、1本化の方向へむかった。

11月2日、合同打合せ説明会が開かれた。この段階で参加決定者は20人を越したが、寄せ集め団体という感はぬぐえず、出席者の一部からは、添乗員なしということなどから、不安が表明された。一方、大多数はすでに顔なじみの豊かな経験者同士ということで安心感がみなぎっていた。

この会の後に辞退者がでた。すでに出発まで半月しかない。旅行業法にもとづく取消料を支払うべきケースである。といっても規定を厳密に解釈すると双方にとって不幸なことになる。適切な解決を出発前に行なうべきであった。1983年日食のときに一年以上もまえから申込金は一切返さないというヒドイ大手会社があって筆者は抗議したが、客の方も節度ある対応が必要である(上記のケースは、ニューカレドニアに行先変更というのが取消しの理由と、ずっと後で知れたのであった)

近畿日本ツーリスト池袋サンシャインシティ営業所を旅行取扱会社としたニューギニア日食観測団一行26名は、1984年11月23日早朝、ポートモレスビーの南東120キロのフラ岬で、見事な黒い太陽を捕えた。その喜びを全員そろって日本へ持ち帰らなかったのに、出発まえからのスケジュールどおり、3名がホンコンに1日余分に泊らねばならなかったのは、残念だった。

× × × × ×

ここまで書いて了とし、改めて編集氏の依頼メモを読み返したら、旅行そのもののウラ話も……とのことであった。

私が添乗員代りの役割をしたというより、一緒に旅した仲間がそれぞれ自主的に分担し合ったので、別に私から明かさねばならないほどのウラ話はないが、ひとつだけ。

1980年アフリカ日食のときは、有名な国際空港で手荷物をスムーズに通関させるために、チップいやワイロを要求されたが、今回はホンコンでもポートモレスビーでもそんなことはなかった。トラベロッジで呼んだタクシーが約束より高い料金を、なんのくんのといってフッかけてきたが、ダンコとして反論したら、苦笑して「わかった、わかった」といって握手を求めてきた。いってみれば一応ためしたのかもしれない。そんな手にのらないぞと堂々わたり合えば、何の事はない、さっさと引込める——まあ、悪気のない雲助かもしれない。

もうひとつ、ホテルでチェックアウトのとき、ミニバー、つまり室内の冷蔵庫内の飲物計算書が本人申立てと違う。本当に飲んでないと主張したら「そうか、ではチェックした当方係員のミスだ」といってかんたんにその請求書を破り捨てた。客を信用するキャッシャーの態度は立派だった(だからといってウソはいけません。多くの客に接しているプロは、ちゃんと見破るでしょう)。そのキャッシャーの仕事ぶりをずいぶん細かいところまで観察したが、非の打ちどころのない満足すべきものであった。